

朝鮮石人像を訪ねて（31）

深田 晃二

★ 堺市内石人像 ★

堺市内の石人像情報を写真と共にYMC Aの西川勝久さんから頂いた。8体も有る。写真に写っている看板の店をネット検索すると、ホームページを持つ写真館で、その住所からGoogleストリートビューで風景を見ると石人像も写っている。場所の特定は直ぐできたので、7月11日の暑い日に訪問した。

J R阪和線・浅香駅で降り立ち地図を頼りに現地に向かう。若い女性の多い町だなと思ったら、女子短大がこれから向かう方向に有るためだった。

R187号の道沿いにくだんの石人像はあった。個人住宅の前に横一列に並べてある。長らく人が住んでいない様子でノックしても返事がない。情報を得たくて隣の写真館の玄関ベルを鳴らした。汗を拭き拭き奥さんが対応してくれた。その情報によると、天王寺辺りで古美術商を営んでいる人（名前はSさん）の倉庫で、平生は住んでいない。月に1度ほど物を取りに来ている。店の屋号は判らないという。石人像を扱いそうな天王寺界隈の古美術商屋号をネットで検索してみたがそれらしい名前は見付からなかった。

大型の梁冠文人像2双、童子像1双、そして小形の宦官（波型帽子）文人像が1双の計8体である。



商品として仮置きしてあるため、本設置する時は土の中に入る土台の部分が全て地上に出ている。土台を除いて足から頭までの高さは、小さい方の文人像は162cm、童子像など小さい像は97~108cmである。大きい文人像は高すぎて計測出来なかつたが、180cmくらいであろう。

鼻が削られている像が多い。童子像は二つのちょんまげ（サンツウサフ）も欠けて満足に残っていない。

「訪ねて25（通信257号）」でも書いたが、みのお茶寮の主人が言ったよう



に「鼻をお守りにする風習が韓国に有り削り取られたからだ。日本で蛇の皮を財布に入れておくと金が貯まると言うのと同じだ」と言う理由で鼻や鬚が削られたのであろう。

★ 大阪・南御堂の石人像由来 ★

「訪ねて29（通信263号）」で南御堂の文人像について報告した。堺市浅香を訪問した日に時間が有ったので由来が聞けないかと再度訪問して事務所に立ち寄った。残業中の事務職員の方が「由来について聞いたことがあるがよく覚えていない」と、機転を利かせてその場でOB職員に電話で聞いてくれた。面白い話が聞けたので報告する。

『戦後になって、庭師が境内整備の折に境内の中に文人と武人の朝鮮石像を1体ずつ設置した。その後御堂筋に面した現在の場所に移設した。お寺に武人は似つかわしくないとして、文人2体に変えた。目立つ場所だけに、近くにある韓国領事館の領事が神戸の自宅から通う折にみつけた。朝鮮の石人像がどうして大阪のお寺にあるのか、と問われたらしい。お寺側は「南御堂は北御堂共々、江戸時代の朝鮮通信使の宿所になっていた。その縁で設置している。」と知恵を巡らして説明をしたという。そういうことなら良い話だと、韓国から東亜日報が取材に訪れ「説明板を置いたらどうか」と助言したことである。』 説明板は今も設置されてはいないが。

朝鮮通信使の宿所であった事に関しては、辛基秀著の「朝鮮通信使往来」の中に話が出てくる。1764年の通信使が江戸での公務を無事果たして大阪に到着した4月7日、大阪北御堂の棕櫚の間で都訓導が殺される大事件が発生した話である。後年「漢人韓文手管始」という芝居が作られ、通称「唐人殺し」と言われ人口に膾炙したという。南御堂の記述は見あたらなかったが、同じ浄土真宗の南北御堂が宿所になっていたのは事実のようである。



改めて南御堂の文人像を見ると、大きさ・顔の表情等から本来の一対のようであるので、武人から文人への変更は同じ庭師が所有していたペアがここで復活したものと思われる。

ここでも鼻が削られている。以前に「運搬作業の荒さで」と書いたことがあるが、数の多さからみて金持俗信による意識的削り取りが本当のようである。

★ 奈良の慶州公園 ★

奈良市在住の福島俊弘さんから情報を頂いた。
「柏木公園に一对の像があることに気付きました。奈良市柏木町にある公園で散歩していた人に聞くと『慶州公園』と言っていました。奈良慶州JC姉妹締結20周年・1994年と刻まれていました。場所は、近鉄橿原線西ノ京駅東約2キロ、県立朱雀高校の南隣です。」

慶州市とのJC（日本青年会議所）姉妹提携にふさわしく、慶州・卦陵の石人像のレプリカの様だ。日本でも見ることができる事は嬉しいかぎりである。
「ものから見た朝鮮民族文化」（新幹社2003年）に「統一新羅の石人像—その成立と役割—」という金巴望氏（高麗美術館研究室長）の論文があり、卦陵の石人像についての研究成果として次のように書いてある。



「胸に手を付けた武人は忠誠を誓う姿態である。卦陵武人は長い巻き毛をヘアバンドで止めている。その風貌は西域でも中国最西部に近い西パキスタンのラホール辺りの民俗を思わせるものである。（以前、現バングラデシュを東パキスタンと言い現パキスタンと区別していた：引用者註）一方、新羅の軍事組織は第31代の神文王の時に再編され、王京を『九誓幢（くそんだん）』という部隊が守ったという。それは九つの部隊の編成で、それぞれ軍服の衿（えり）の色で部隊を分けた。上位3部隊は新羅民で編成し、中位3部隊は高句麗民、下位2部隊は百濟民、最下位の部隊は靺鞨人などで編成した軍隊である。それぞれの部隊は国王に忠誠を誓ったものであったらしい。新羅の武人像は九誓幢の象徴であったのであろうか。そして文人は「軍師」としての役割を担った者ではなかったかと、考えられるものである。』『護国のために軍事力を強化する使命を帯びた軍師（武官）が唐に出向き、苦心の末にようやく傭兵として異民族の彼らをつれて帰り、国王に報告したのであろうか。新羅の石人は彼らと共に謁見した状況を表した物で、私にはそのときの国王の驚きと喜びというものが、石人から受け取れるのである。』

文中の最下位部隊が「靺鞨人など」で構成されるると有るが、靺鞨人とは一般に中国東北部から朝鮮半

島北部に住んでいたツングース系諸族の中国側からの呼び名であり、渤海を建国した種族である。「靺鞨人など」の「など」にパキスタン人らが分類されていたと言うことであろう。

新羅38代の元聖王陵に比定されている掛陵の日本版としての柏木公園を近いうちに訪問したい。

★ 「石人の風景」 ★

高麗美術館の創設者・鄭詔文の実兄鄭貴文氏の論文「石人の風景」を堀内さんから頂いた。「日本の中の朝鮮民芸美」（1987年3月29日朝鮮文化社発行）という、高麗美術館設立（1988年）の前年に発行された本からの論文である。

本シリーズの一等最初「訪ねて（1）（通信230号）」で、世中博物館のJang館長が2000年に京都嵯峨野の湯豆腐屋の12体を訪問した時の事を書いた。各々の像の前に日本の旗を供えているのを目撃し激怒し「第一に奪ったことは悪いことだ。しかし、使い方を間違うと、それは無礼に当たる。」と。

この論文には12体がなぜ湯豆腐屋に有るのか由来が書いてある。

『湯豆腐屋の主人に聞くと、数年前徳島県の去る所から搬入したのだそうだ。（中略）パンフレットによると「関白秀吉朝鮮石神壱式体招来安置」とある。だが、日本にある石人の多くは、明治以降もずっと後に持ち運ばれたと言われている。いずれにしても朝鮮では石人であって「神」ではなかった。』

論文では石人一般について含蓄のある文章が並ぶ。置かれた石人が風景や環境を作り出す例を紹介した後、石仏との違いについて次のように述べている。

『石人の製作にはその必要性からして制約があつて、たとえば背丈などは画一的となった。しかし工人達の志向は表情にこめられた。十体が十体とも風貌が異なり、謹厳ぶつて居るのもあれば、くすっと笑みを溜めたりもして変化に富む。石仏の時代は、製作されれば尊崇の対象となつたものだが、石人は墓守りに甘んじなければならなかつた。』

★ 国立文化財研究所の総合学術調査 ★

「朝鮮王朝総合学術調査報告書4、5巻」が2013年12月に文化財庁傘下の国立文化財研究所から発刊されたと言う東亜日報の記事を寺岡さんから頂いた。報告書では、『第18代顯宗（ヒョンジョン）王の崇陵は東九陵内にあるが、17代孝宗の墓を移転した際に残っていた石物を再利用するように命じ「民衆が困窮しているので支出を減らそうとした王室の愛民精神が豊かに宿る」としている』と報じている。2006年から始まり2009年に最初の報告書が出され、2015年には全8巻が出そろう予定だそうである。王陵物語として面白そうだ。

(続)